

1 はじめに

本校は、鹿児島県の南に位置する“かつおの街”枕崎市にある全校児童 168 人（7 学級）の学校である。

「明るいあいさつ花咲き香る桜山小学校」を学校自慢に、朝は気持ちのよいあいさつから始まり、全校児童が元気に活力のある学校生活を送っている。

2 児童の生活に読書が根付くことを目指した取組

子どもたちの生活に読書を根付かせるため、様々な取組を学校・家庭・地域が一体となっ

て行っている。

(1) 読み聞かせ活動

図書委員会・中学生・教職員・ボランティアグループ「すずの音」

中学生の読み聞かせは、平成 22 年度より実施されており、児童も年 3 回の読み聞かせを楽しみにしている。

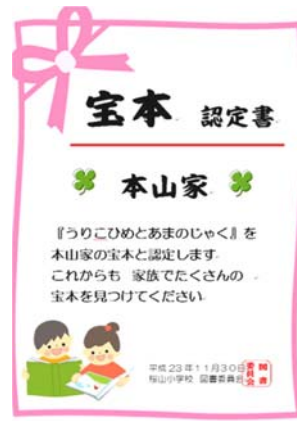
ボランティアグループ「すずの音」は、平成 18 年に当時の P T A 会員 3 人で発足し、現在、すでに P T A を退会された方を含め、総勢 13 人で小・中学校で読み聞かせ活動を行っている。

(2) 宝本

本校では、様々な活動に取り組んでいるが、やはり、子どもたちにとって、一番身近で、一番最初に本に出合わせてくれる存在は親である。読書を習慣化するためには、やはり家庭の協力が必要だと考えた。そこで、家庭での読書“家読”として、“親子読書”を家庭に呼びかけてきた。あまり、気負わない感じで実施したいと思い、夏休みや冬休みなどの長期休業を中心に実施してきた。実施された家庭からは、「久しぶりに、いいコミュニケーション図ることができた。」「お父さんに読んでもらってよかった。」などと、様々な感想をいただいた。そして、この活動を何か形にしたいと思っていたので、県立図書館で紹介された「宝本」の取組を、本校でも実施することにした。各家庭に親子読書の呼びかけと同時に、親子で大切にしたい、大切にしている本、何度も読み返したくなる本である「宝本」の紹介をお願いした。

集まった素敵なエピソードを冊子にして、全家庭に配布した。また、宝本を紹介してくれた家庭には、「宝本認定書」を渡した。

冊子を全家庭に配布できたことで、家庭の読書に関する意識が少し変わったように感じる。



(宝本の取組)

(3) 読み友の日

読書の入り口である読み聞かせは、幼児期は家庭で取り組んでいても、小学校に入学すると外で働く親が増加し、忙しくなるため取り組む家庭が減少してしまいがちになる。

そこで、上学年が下学年に読み聞かせを行うことで、する側・してもらう側、共に楽しさを感じコミュニケーションを深めることができると考える。そして、この体験が、将来親となったとき、本の楽しさを子どもに伝えることができる手がかりになると考え、取り組んでいる。



(読み聞かせの様子)

(4) 国語科の授業と連動したブックトークやアニメーション

1年生・・・「くじらぐも」

2年生・・・「お手紙」

3年生・・・「すがたをかえる大豆」

4年生・・・「いろいろな意味をもつ言葉」

5年生・・・「百年後のふるさとを守る」

6年生・・・「学級討論会をしよう」

様々な取組で、子どもたちに本を読むことの楽しさを感じさせることができるようになってきたが、「楽しい・読みやすい本」が好まれ、読書の広がりや深まりが不足している。

そこで、担任と学校司書が教科と連動したブックトークやアニメーションで読書の質の向上を目指している。



(ブックトークの様子)

(5) 職員研修

教師も、年間を通して計画的に読書指導を実施しなければならない。朝読書の全国的な普及で、子どもたちの読書量は増加しているが、読書の広がりや深まりなど読書の質の向上にはなかなか至らないのが現状である。そこで、研修の中でブックトークやアニメーションなどを体験させ、教科での取組を理解させた。

今後は、調べ学習時の学校図書館の有効利用方法について体験させ、今後の指導へ役立てさせるとともに、子どもの調べ学習に役立てていただきたいと考える。

(6) 家庭での読書時間確保（生活リズム調査）

本校では、家庭での生活リズム調査を実施しているが、メディアタイムの時間が多い家庭が多い。そこで、メディアタイムを読書タイムへ変更していこうと、保護者の方々から声が上がった。学校での読書活動の取組が家庭へ浸透しようとしていることがうかがえる。読書が生活に根付く一歩となってほしい。

3 おわりに

本校は、読書活動に特に力を入れて取り組んでいた学校ではないが、司書教諭(学級担任)と学校司書の5年にかけての地道な取組が、全職員の読書に対する意識を向上させ、子どもたちへの指導に繋がり、本を読むことの楽しさをより一層味わわせることができたと思っている。今後も、子どもたちの生活に読書を根付かせるため、学校・家庭・地域が一体となって取り組んでいきたい。